「うぅぅ……なにこれ……グロテスクだし、臭い……」
「おじさん……ちゃんと洗ってるの？」
「失礼だな。お前のほうがよっぽど汚いぞ？」
「そ、それは……そうかもしれない、けど……」
「それよりほら、さっさときれいにしろよ」
「おぅぅ……わ、わかったよ……」
（うわ……ひどい匂い……これ舐めるの？）
（なんか白いカス……？　みたいなのついてるし、最悪だわ、もう……）
プッ　プッ　プッ
（でも、仕方ないのよね……さうしないとごはんも食べられないし……）
「れろ……っ！　ちゅぷっ、べろっ……！」
（うぅ……生臭い……大きい……口の中がおちんちんでいっぱいだ……）
「おぉ、なかなかうまいじゃないか。慣れてるのか？」
「そんなわけないでしょ……こんなこと、初めてしたもの」
「へえ、それじゃ才能だな。ほら、もっとしゃぶれよ」

「ちょ、待って――――んぐっ!? んぐっ……!」
「ほら、舌をつかってチンコの先っぽおたりをなめとるんだ」
(舌で……先っぽぉ?)
(こ、こう……かな?)
「れろっ、ちゅる……ちゅるる、れろっ……」
(うう……この白いの、すごく臭い……口の中に残って嫌な感じ……)
「あぁ……そんな感じだ。もっと丁寧に、きれいに掃除するみたいにして舐めるんだ」
ぴくぴくしてる
「ふぁ、ふぁい……れろっ、ちゅるっ、れろれろ……」
(こ、これもごはんを食べるため……こっちで生きていくため……)
「れろっ、ちゅるるっ、ちゅる……ん、んん……!」
「じゅるっ……こ、これでいい? けっこうきれいになったよ」
「おう、よくやった。じゃあ、次は奥まで咥えるんだ」
「えっ――――奥って……きゃあっ!」

「んぐぅっ!? ぐぅぅっ……!」
(おちんちんが喉の奥まで……っ! く、苦しい……!)
「歯ぁ立てるなよ。ほら、よだれをたっぷり絡めてしゃぶるんだ」
「んぐっ……! ん、んん……! じゅる、じゅるる……!」
「そうだ。根本までしっかりしゃぶれ」
「んぐっ……! じゅぷっ、じゅるるっ……!」
(やだ……よだれが垂れちゃう……!)
「なんだ、よだれ垂らして喜んでるじゃないか。やっぱり慣れてないか?」
「じゅるっ、んぐっ……んぐぐっ……!」
(そんなわけないじゃない……! おじんさんのが大きいから口が閉まらないだけっ! それに……なんだかしょっぱいのが出てきた……?)
「ほれ、我慢汁もちゃんと啜り取るんだぞ?」
(がまん……じる? これ、がまんじるっていうの? 変な味……こんなの飲みたくないけど……しなきゃ……)
「ちゅる、ちゅるる……!」
「おぉ……いいぞ、そろそろ……出るっ!」
(え……出るって、どういうこと――――)

「んんっ！　んん～～～～～っ！？」
（なにこれ……っ！
生臭くてドロドロしたのがいっぱい……！）
「くうっ……！
ほら、こぼすなよ。ぜんぶ口で受け止めるんだ」
「んうぅ～！　んぐっ、んん――――――っ！」
ドピュッ
「けぼっ、ごぼっ……！　うぐ……口の中にまだ
生臭いのが……けぼっ……！」
「ふう～……お疲れさん。けっこう上手かったぞ」
「……上手くても意味なんてないし
それより、これで満足した？　ならバーガーを――――」
「そうだな……次はお前、そこでションベンしてみろ」

「えっ……おじさん、いまなんて……？」
「だから、ションベンだよションベン。ほら、そこでしてみろよ」
「なっ……ど、どうして！？　約束通り、その……お、おちんちんはきれいにしたのに！」
「別にそれだけとは言ってないだろ。ほら、はやくしろ」
「でっ、でも……さんなところで……」
「どうせ、いつもその辺でしてるんだろ？なら変わらないじゃないか」
（それは、そうだけど……でも、なるべくはお店のトイレを借りるようにはしてる）
（……それも、最近じゃ拒否されるようになっちゃったけど）
「まあ、嫌ならそれでもいいが――――」
「っ！　わかった……する。するから……。私、おしっこする……」
とろぉ…

「んっ、んんっ……」

「おー、可愛い顔してけっこう豪快だな」

「だ、だって……おじさんがそうしろって言うから……仕方なく、だもん……」

「よし、じゃあ……」

「撮影完了……っと」

「ーーーえっ、も、もしかして今、撮ったの……？」
「あぁ、記念にな。よく撮れてる」
「なっ、なにするのっ！
消して、今すぐ消して！」
「おいおい、動くなよ。
ションベンがかかって汚れちまうぞ？」
「う、く……」

「まぁそう睨むなって。これで、
メシにありくつ大変ぎがわかっただろ？」

「さ、最低……っ！
女の子にこんなことさせて
写真まで撮るなんて……」

「ションベンしながら説教されても
説得力ないぞ？」

「くぅ……」

「どうだ？　美味いか？」

「……」

「そう呪むなって」

「あんな写真撮っておいて、嫌われないとでも思ってるの？」

「なんだよ。それでも餓え死ぬよりマシだろ？」

「ありがとう、助かったわ」

「よし、それじゃあ行くか」

「……え？　行くって、どこに？」

「俺の家だよ。お前、どうせ行くところなんてないんだろ？」

「な、なに言ってるの！　おんなじとされて、ついていくわけないでしょう！」

「へえ……じゃあ、この写真どうする？」

「あ……！　そ、それ消してよ！」

「嫌だね。それに、悪い話じゃないだろ？」

「俺の家にくれば、ひとまず寝床やメシは心配ない。こんなとこにいるよりマシだろ？」

「……」

（こんな人の家に行ったら、何をされるかわからない……。
それなら、あそこに戻ったほうがまだマシかも……）

「……無。おじさんの家になんか行ったら、
ネにされるかわかんないもん」

「ほう……じゃあ、
この写真はネットにでもあげておこう」

「よかったな、お前。ただのホームレスから、
優秀なオカズに出世だ。ぐぐぐぐ！」

「う……！　さ、最低！」

「そんなことより、どうする？　来るのか来ないのか」

「……」

あの写真がネットにアップされたら、
学校のみんなにも見られちゃうかもしれない……。
それに……院のみんなにも。
私のわがままのせいで、みんなに
迷惑をかけるわけにはいかない。
「……わかった。ついて行けばいいんでしょ？」
「おお、それでいいんだよ。それじゃ、行くぞ」
（みんな、先生……ごめんなさい……私、
もうみんなのところに戻れないかも……）

でも、そんな『普通の生活』を送るためには、
おじさんの言うことを聞く必要がある。
一回の食事、一回のお風呂、一回のトイレ。
それらのたびに、
おじさんからの命令を聞かなきゃいけない。
こんなのが『普通の生活』と呼べるのかはわからないけれど、
おしっこしてる写真も撮られてるし、仕方がない。
それに……ここから逃げても、
また路上生活に逆戻りするだけだから。
「じゃあ、教えたとおりにやってみな？」
「は、はい……」
まず私が教え込まれたのは、コレ。
がばっと大きく足を開いて、
恥ずかしいところを見せてのオナニー。
最初は少ししか開けなかった足も、
今ではこんなに開いちゃってる……。
ドキ
ドキ

「あーあ……マジじゃねえか。せっかく買ってやったのに、どうしてすぐ汚すんだ？」
「ご、ごめんなさい……すぐびちゃびちゃにしちゃって……私、お汁が多くて……あぁんっ！」
「はっはっは。こりゃ、また新しいパンツ買わないとな？」
「は、はいっ……あぁんっ！　んんっ……！」
私はおじさんに見せつけるようにしてオナニーを続ける。
清潔だった下着はいやらしい染みができて、どんどんぐちょぐちょになっていく。
私がそうなっていくと、おじさんはますますニヤニヤしてくる。
本当は嫌だし気持ち悪いけど……、
そんなこと言っても仕方ない。
だから、もうあんまり考えないようにしてる。
「んぁぁっ……！　はぁ……はぁ……っ！　んんっ、あぁんっ！」
「はっはっは。いい眺めだな。ほら、いつもみたいに指を見せてみろ」
「は、はい……こう、ですか……？」
「わ、私のおまんこ汁……こんなに溢れてます……」
「し、下着から染み出て……んんっ！　指が、こんなにトロトロに……なってます……っ！」
「よーし良い子だ。じゃあ、そろそろパンツおろしていいぞ」
「は、はい……ありがとうございます……」
ズちゅ
ズちゅ

「はぁ……はぁ……んっ……！」
「おーおー、よく見えるぞ。湿って湯気が出てる」
「やっ……お、おじさん……近いって……息がかかって……あぁんっ！」
「こんなに雌臭が濃いんだ。近くで嗅ぎたくなるだろ」
「やっ、そんな……鼻先、ついちゃう……んんっ……！」
おまんこがオナニーでたっぷりほぐれると、おじさんは思いっきり私のにおいを嗅ぐ。
おまんこに鼻を近づけて、深呼吸でもするみたいに思いっきり息を吸い込む。
最初は恥ずかしくて嫌だったけど……。
今は、そんなおじさんが少し可愛いなって思ったりもする……。
だって、すっごく夢中になってるから。
とろぉ…
「じゃあ、よく見えるように広げてみな」
「は、はい……」
「あっ……あぁ……っ！　んんっ、こ、これでよく見えますか……？」
「あぁ。ぐっちょぐちょの雌穴と勃起したクリトリスがはっきり見えるぞ」
「んんっ……だめっ……そんなじっくり見られたら……んっ！」
「ひくっ……ヒクヒク……しちゃうから……んんっ！」

「はぁ……はぁ……ンッ……あぁん……！」
「なんだ、辛そうだな。どうしたんだ？」
「わ、わかってるくせに……んん？
わざわざ聞かなくてもいいでしょ……」
「いーや。言葉にしないと伝わらないぞ？
ほら、なにかあるならはっきり言ってみろ」
「……う！　く、くぅ……」
「お、おまんこ……トロトロで、うずいちゃってます……」
「ひ、広げてるだけで……見られてるだけで……っ！
は、発情しちゃうんです……だ、だから、その……」
「んん？　だから、何だ？」
「だ、だから……指を、入れてもいいですか……？」
「指い？　そんなもん入れてどうするんだ？」
「エッチな汁をたっぷり絡ませて……んんっ！
とろとろになったおまんこをかき回したい……んです」
「だから、お願いします……おまんこ、かきまわしてもいいですか……？」
「しょうがねえなぁ。いいぞ」
「あっ、ありがとうございます……！」
このセリフも、最初は言わされてるだけだった。
でも毎日言ってるうち……嫌々でも言っていると、
なんだかそんな気分になってくる。
実際、今の私は……おまんこをかきまわしたくて
しょうがなくなっている。

キュン

「ふぁーーーふぁぁぁぁぁっん！
指、ぐぐぐ……奥まで……あぁっ、んんっ！！」
「気持ち良い……あまんこ、トプトプって
かき回すと……気持ち良いっ！！」
「ははは、すごいことになってるな。
汁がジュプジュプ飛んでるぞ」
「だって……っ！気持ちよくって……っ！
んんっ、あぁんっ！んんっ……！」
「ヒクヒクってして……んんっ！おじさん、
私そろそろイッちゃいそうです……っ！」
「ふぁ——ふぁぁぁぁぁっ！！」
「あっ……あぁあっ……！止まらないっ、んんっ！
ぷしゅぷしゅうって、止まらない……ッ！」
「ははは、よくやったな。
じゃあ、飯食っていいぞ」
「は、はい……ありがとうございます……」
ぷしゅあぁ♥

「だっ、だめ！まだ拭いてないから見ないで！」
「本当だ、びちょびちょじゃねぇか。それに、ションベンくせぇマンコだな」
「あ、当たり前でしょ……今、その……
お、おしっこしたんだから」
「あぁ、でもな、これはなんだ？」
「えっ――――ひゃっ！」

「だめっ、今触っちゃ……んんっ、おんっ……！」
「なんだ粘っこい汁が出てるぞ。こりゃあションベンじゃねぇよなぁ？」
「やっ……んんっ！そ、それは……仕方ないじゃない、おちんちんしゃぶってたんだから……んっ！」
「お前、ちんこしゃぶりながらションベンして、マンコ濡らしてたのか？」
「やっ、やめて！そんな言い方……おおんっ！」
「まだションベンが残ってるかもしれないからな。おれがかき出してやるよ」
「やっ、くちゅくちゅしちゃ……おおんっ！あっ、んんっ！場所、違うし……おぉっ！」
「ほら、どんどん溢れてくるぞ？まだションベンが残ってたんじゃないか」
「そ、それはおしっこじゃなくて、その……おぉっ！んっ……え、えっちなおつゆだからっ、んんっ！」
ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ
私、おしっこしたばっかりのおまんこを弄られてる……。こんなの恥ずかしすぎるよ……。でも気持ち良い……。おちんちんしゃぶってた時からむずむずしてたところ、ぐちゅぐちゅってされてる……！

「おじさんダメっ！　それ以上すと、また出ちゃうからっ、んんっ、あぁ……ン！　ぐちゅぐちゅしないでぇ……！」
「ん？確かに、どんどん溢れてくるな。だしねぇ女だ」
「そっ、それは……おじさんがなかなかおしっこさせてくれないから……」
「なんだ、少し漏らしたのか？はは、情けねぇ話だな」
「と、とにかく！　もうダメなんだから……あぁんっ！んっ、はぁ……はぁ……あぁんっ！」
「そうか。じゃあ全部かき出さなきゃな」
「えっ……？」
おじさんは、
さっき射精したばかりのおちんちんを取り出した。
そしてその先っぽを、おしっことエッチなおつゆでぐじゅぐじゅになっている私のアソコに押し当て――――

「ふぁっ……あぁぁあぁぁあぁっ！
入って……きたぁ……太いおちんちんが……んんっ！」
「おじさん、さっき出したばっかりなのにどうして
こんなに大きいの……っ！　んんっ、あぁっ！」
「目の前でフェラしながらションベンして
マンコ濡らす女がいたら、興奮しないわけがないだろ？」
「あうう……やっぱり変態だ……」
「なんとでも言え。ほら、まんこの中身をかきだすぞ」
「あっ、あぁっ！太いのでっ、かき回されるっ……！」
「うぐっ……へへ。お前の膣内、
ちんこに絡みついてくるぞ？」
「べっ、別に意識してやってるわけじゃ……あぁんっ！
んっ、んっ、んっ……！あっ、あぁあんっ！」
「おちんちんのくぼみが中でひっかかって……んっ！
いっぱい、感じちゃう……あぁんっ！」